

内保連、外保連、看保連合同シンポジウム
医療の崩壊を防ぐためには？ 三保連からの提言

日時：平成 19 年 9 月 1 日（土曜日）午後 2 時～5 時

会場：癌研究会有明病院吉田記念講堂

（東京都江東区有明 3-10-6、りんかい線国際展示場駅、ゆりかもめ有明駅から徒歩 5 分）

プログラム

開会：齊藤 壽一（社会保険中央病院 院長、内保連 代表）

シンポジウム

司 会：

井部 俊子（聖路加看護大学 学長、看保連 代表）

山口 俊晴（癌研究会有明病院消化器外科 部長、外保連 会長）

講演（2：00～3：40）

（1）基調講演：出月 康夫（外保連 名誉会長）

（2）内保連：山口 徹（日本循環器学会 理事長、虎の門病院 院長）

（3）外保連：岩中 督（外保連手術委員長、東京大学小児外科 教授）

（4）看保連：紙屋 克子（筑波大学人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻 教授）

（5）日本外科学会：田中 雅夫（日本外科学会副会長、九州大学大学院臨床・腫瘍外科学 教授）

休憩 10 分

質疑および総合討論（3：50～5：00）

司 会：齊藤 壽一、山口 俊晴、井部 俊子

討論者（全員）

閉 会：山口 俊晴

三保連合同シンポジウムの狙い

歳出削減のためにわが国で導入されている低医療費政策は、数年来強く危惧されて来た通り、すでに多くの医療現場で地域医療の崩壊を招きつつあることが現実の事態となっている。このことは医療現場からの切実な叫びや多くの医療関係団体の声明からも明らかである。一方、わが国では国民皆保険制度に支えられつつ過去数十年、医学、医療の進歩は国民の健康維持に着実に反映され、国際的に見ても最も高い健康寿命や低い新生児死亡率が達成されて来た。しかしながら現在、わが国の低医療費政策の帰結として特に病院では医療従事者の不足や過重労働が進行しており、また諸外国で広く行われている最新の医療技術の導入が遅滞するなど、医学、医療の最新の進歩を速やかに現場に還元することが困難となりつつある。内科系学会社会保険連合、外科系学会社会保険委員会連合そして看護系学会等社会保険連合は国民が国の内外で究明されあるいは開発された目覚ましい医学、看護の進歩からまさに置き去りにされようとしていることを訴えるために本シンポジウムを企画した。わが国の医療やその政策に関わる方々に止まらず、広く国民各位にこの危機的状況を訴え解決策を探る機会となることを期待したい。

(内保連代表 齊藤 壽一)

日本の医療制度が崩壊寸前であることは、数年前より一部の識者から指摘されてきたことであるが、最近それが現実のものとなりつつある。たとえば地方病院を中心とした、医師の病院離れに伴う、病院の機能麻痺の続出はすでに大きな社会問題となっている。また、過重な勤務による医療労働者の疲弊、診療報酬の削減による病院経営の悪化などは、現場における努力だけでは解決できない問題を含んでいる。このような日本医療の危機的状況を冷静に分析し、それに対して実効性のある対策を提言することが学会にも求められている。今回、関連する学術団体により組織されている、内科系学会社会保険連合、外科系学会社会保険委員会連合、看護系学会等社会保険連合は、現在の危機的状況を打破するために、本シンポジウムを企画した。本シンポジウムが、医療界の危機の回避に向けた、三保連の協同作業の第一歩となることを期待したい。

(外保連会長 山口俊晴)